

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370039

研究課題名(和文) 解釈学の展開と創造性 デルタイの基礎概念 現象・構造・理解 に基づいて

研究課題名(英文) Development and creativity of hermeneutics. Based on Dilthey's basic concepts <phenomenon, structure and understanding>.

研究代表者

山本 幾生 (Yamamoto, Ikuo)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：00220450

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はその成果として以下の三点を明らかにした。1) 解釈学の創造性が生そのものの現象・構造・理解の統一的連関に由来すること、2) デルタイからハイデガーを介した20世紀の解釈学もこれに基づいて創造性がそれを制約する事実性と一体となって展開したこと、3) これは「別の路線」のデルタイからミッシュへの解釈学では、解釈学が生その営みとして歴史的創造性をもった生の語りとして展開したこと、以上を明らかにした。

解釈学は現象・構造・理解の統一的連関として歴史的に生じた語りを理解・解釈し、それを将来に向けて語り出す学として、解釈学自身の営みにその創造性を求めることができるのである。

研究成果の概要(英文)： This research is summarized by the following three points. 1) the creativity of hermeneutics derives from the unifying link of <phenomenon, structure and understanding> of life in itself. 2) the 20th century hermeneutics, that derived from Dilthey and developed through Heidegger, was also based on this, and moreover the creativity of hermeneutics, united with the facticity that restricts itself, developed historically. 3) by the Misch's hermeneutics, who walked "the different way" from Heidegger, hermeneutics as the work of life developed as the work of "logos", that has historical creativity.

Hermeneutics, as the unifying link of <phenomenon, structure and understanding>, understand a historical logos and speech that for the future. Such hermeneutics can find out their creativity in their own work.

研究分野：哲学

キーワード： 解釈学 解釈学的論理学 デルタイ ゲオルク・ミッシュ

1. 研究開始当初の背景

20世紀に展開した解釈学は、ディルタイ晩年の『解釈学の成立』(1900)および『精神科学における歴史的世界の構築』(1911)とその『続編の構想』(遺稿)などで語られた理解概念を受け継ぎながら、ハイデガー『存在と時間』(1927)では可能性の「投企」によって、ガダマー『真理と方法』(1960)では時代の隔たりの「地平融合」によって、そしてリクール『解釈学の課題』(1975)ではテキストの書き手も読み手も帰属しない「テキストの事柄」によって、解釈学の創造性を展開してきた。しかもこの展開は、ディルタイは晩年に心理学から解釈学に方向転換して解釈学を創始したが問題(ロマン主義的傾向、自然科学的方法の影響)も残したため、それを克服する道筋としても描かれてきた(ガダマー上掲書、ペゲラー編『解釈学的哲学』(1972))。

しかし、ディルタイ全集第19-26巻(1982-2006年刊行)が初期から晩年までの講義録や草稿などの遺稿を収めて公刊されて以来、彼の晩年の解釈学は、心的生の意識現象の客観性を確認した初期の認識論的分析と心的生の構造連関を分析する中期の心理学的分析とによって支えられていること、したがって従来のディルタイ像(心理学から解釈学への方向転換)は妥当性を持たないことが、明らかになっている(ベルトラムほか編『ディルタイと哲学における解釈学的転換』(2008))。

この新たな研究動向からすると、本研究が目指す「現象・構造・理解」という三概念は、国内・国外で、解釈学と現象学の関係を主題化した研究(新田義弘『現代哲学-現象学と解釈学』(1996)、マティアス編『解釈学的現象学-現象学的解釈学』(2005)のなかで、あるいは構造主義と解釈学を主題化した研究(渡邊二郎『構造と解釈』(1988)、リクール「構造と解釈学」(1963)、ローディ「生の構造連関」(1998)のなかで取り扱われてはいるが、ディルタイの新資料に基づく三概念の統一的連関の解明およびその統一的連関による解釈学の成立の解明は、まだなされていない。

と同時に、解釈学の道はディルタイを創始者としてハイデガーからガダマーへ歩まれた道だけでなく、それとは「別の路線」(ボルノー)、すなわちディルタイからゲオルク・ミッシュおよびゲッティンゲン学派(ケーニヒ、リップス)への道もあったが、ミッシュがハイデガーを批判した『生の哲学と現象学』(1930)以来、ほぼ議論にのぼることはなかった。それがボルノーの『解釈学研究 第2巻 ゲオルク・ミッシュとハンス・リップスの解釈学的論理学のために』(1983)の出版、そして編者ローディによる『ディルタイ年報』11巻(1997/1998)および12巻(1990/2000)に

よる「ミッシュ特集」などを端緒にしてミッシュの『生の哲学を地盤にした論理学の構築』(ローディ、ベルトラム編)を中心とした解釈学的論理学の掘り起こしが始まった。しかし、ミッシュの『生の哲学と現象学』を中心とした生の哲学について触れられることはほとんどない。とりわけ解釈学で重要なのは、ディルタイの理解概念(追体験・追形成)の展開(ハイデガーでは可能性の投企、ミッシュでは弁証法)の解明であるが、それもなされていない。

したがって今日のディルタイおよび解釈学の研究は、ディルタイ全集第19-26巻所収の遺稿を踏まえ、ディルタイに始まる解釈学の二つの道(ハイデガーへの道とミッシュへの道)を視野に入れる必要がある。

2. 研究の目的

したがって本研究にとっては、まず、ディルタイの新資料が公刊され始めた1980年代以後の研究動向の中にあつて、解釈学の出発点をディルタイ晩年の「解釈学の成立」などで語られた理解概念だけに求めるのではなく、彼の初期・中期の認識論的・心理学的分析の草稿・講義録にまで遡り、彼の解釈学の成立基礎を掘り起こす必要がある。それが本研究で目標としている「現象・構造・理解」という三概念の統一的連関の解明である。

ディルタイにとって「理解」は追体験・追形成として心的生の働きである「意識現象」であり、その客観的妥当性が認識論的に基礎づけられたのである。しかもそれは、心理学的分析によって取り出された心的生の「構造連関」に従った心的働きである。こうした働きが、自然科学の演繹・帰納に対して、既知から未知を捉える「類比の働き」であり、これが精神科学の方法概念に仕上げられたのである。この点の解明がまず目標となる。

次に必要なのは、こうした追体験としての理解が、ハイデガーとミッシュへの二つの道で受け継がれていったことの解明である。すなわち、ハイデガーへの道では可能性の投企として展開され、ミッシュへの道では部分と全体の相互作用的な弁証法的運動として展開されたのである。その二つの道を比較検討することによって、「現象・構造・理解」のもつ創造性を見いだすことが本研究の目標となる。

本研究は「現象・構造・理解」の統一的働きを解明することによって、「意識現象の構造連関」に従った、過去から未来への歴史的社会的連関の創造的形成」の解釈学を提示することを目標としている。

3. 研究の方法

本研究は、いわば研究室にあっては、ディルタイと解釈学の展開に関する文献資料の蓄積・整理・意味分析を行い、口頭発

表および論文として成果を公表する。そして研究室外にあっては、ディルタイ研究を牽引している日本ディルタイ協会と連携して2ヶ月に1回程度の割合で研究会（ディルタイ・テキスト研究会）を開催し、本研究の成果の批判・評価を得るためにテキスト講読とともに研究発表を行い、そこで得られた知見を本研究の成果に反映させる。

4. 研究成果

成果は三点にまとめられる。一つは、(1) 解釈学の創造性が生そのものの「現象・構造・理解」の統一的連関に由来すること、そして、(2) 20世紀の解釈学もこれに基づいて創造性とそれを制約する事実性が一つになって歴史的に展開してきたこと、さらに、(3) ディルタイからハイデガーとは「別の路線」を歩んだミッシュでは、解釈学の営み自身が歴史的創造性を持ったものであること、以上の三点を成果として明らかにした。詳しくは以下の通りである。

(1) 20世紀の解釈学はディルタイ晩年の哲学に依拠して展開しており、従来の研究もこれを前提に進められてきた。これに対して本研究は、ディルタイの解釈学が「現象・構造・理解」によって成立していること、したがってディルタイ哲学の晩年だけでなく、初期における文学研究、そして中期における精神科学の認識論的基礎づけから心理学的基礎づけのなかで遂行された方法論の形成に基づいていること、この点を明らかにした。

とりわけディルタイ中期における方法論は、認識論的基礎づけでは「現象性の原理」における「覚知」と「基礎的論理操作」によって、そして心理学的分析では「比較」と「追体験・追形成」によって形成され、これらがディルタイ哲学では周知の「自己省察と理解」という精神科学の方法として、そして晩年では「体験・表現・理解」という解釈学の方法として語り出されたのである。したがって解釈学は晩年になって心理学分析から転換して初めて成立したわけではない。初期から中期における、想像力による未知のものへ創造的に跳躍する体験概念の分析、そして意識現象の客観性を求めた「現象性の原理」の形成、さらには体験の構造の分析による体験・追体験・表現としての自己省察の方法論的形成、これらによって初めて解釈学が成立したのである。

本研究ではこれら初期から中期に分析された諸要素を簡単に「現象・構造・理解」として提示した。すなわち、ディルタイの解釈学の中心概念となる「理解」は、初期から中期において分析された想像力による創造的跳躍の働きを基本として、それが空虚な跳躍とならないために「現象性の原理」によって確認された「意識現象」を最終的な試金石とすること、したがってその心的生の「構造連関」に従った「追体験」とい

う働きであること、かくして解釈学が「現象・構造」の事実性と同時に「理解」の創造性を不可分に備えていること、これを解明し、提示した。

(2) このような解釈学の創造性が、「現象・構造・理解」において事実性と一体になって形態で、ディルタイ以降の20世紀の解釈学のなかで展開してきたのである。すなわち、ディルタイ以降、ハイデガーにおいては、理解は可能性への投企として展開されるが、これは「被投的投企」として被投性としての事実性と一体になったものである。したがって解釈学も歴史（存在の歴史）の解釈学として歴史という事実性と将来に向けた創造的投企が一つになって展開するのである。

これを受けたガダマーにおいても、一方では「時代の隔たり」という事実性に対して「地平融合」という創造性が語られ、そしてフランス語圏に渡ってリクールにおいても、「テキストの語り手と読み手」という解釈を制約する事実的なものに対して創造的な「テキスト世界」（リクール）が語られてきた。このように、事実性と創造性の両側面を含んで解釈学は展開してきたのである。

(3) 本研究は以上のようにディルタイから出発してハイデガーへ至る道の展開だけでなく、従来の研究ではほとんど議論されることのなかったゲオルク・ミッシュの生の哲学と解釈学的論理学をも視野に入れた。これによって本研究は、ディルタイからハイデガーへ至るのとは「別の路線」の解釈学の動向と特徴を解明し、解釈学の創造性を生そのものの深みと多様性に求めることを試みた。それを本研究の副題である「現象・構造・理解」に即して分節すると次の通りである。

生の「現象」は生の深みにある「究め難きもの」と思考適合性の緊張関係から多様に産出されるものである。しかもこうした多様に産出される生の現象は、各々の歴史的社会的現実の中での現実認識・価値評価・目的設定によって条件づけられ、各々の統一的全体として時代時代で新たに形成されてきたものである。このゆえに、生の現象それ自身が歴史的社会的な創造物にほかならないのである。したがって、この創造を導く「構造」は、現実認識・価値評価・目的設定を形成する生のカテゴリーに求められるのである。それは、ミッシュではディルタイの生のカテゴリーを引き受けて、「惹起（能動と受動、力）と意義化（価値、目的、意味）の対立」という連関したものに求められる。生はこのような「構造」から創造的に「現象」するのである。したがって生の「理解」は、こうした現象の理解である。その典型として、理解は生の多様な表出としての語りを理解することとして

展開する。すなわち、ミッシュの解釈学的論理学はこうした「語り(ロゴス)」の分析として展開するのである。

したがって、ハイデガーがディルタイの理解概念(追体験)を可能性への投企として展開したのに対して、ここでは、生の語りを追体験するとして、相互的に語りが進行する弁証法的運動(ディア・ロゴス)として展開するのである。語りも生と同様に生の深みの緊張関係から歴史的社会的な語りとして創造的に産出されるのである。かくして解釈学が創造的に語り出すという点に、ハイデガーが展開した先行的投企としての理解概念が融合してくる。解釈学が語りの理解として将来的可能性に向けて新たに語り出す営みとして展開するのである。

解釈学が現象・構造・理解の統一的連関として語りを理解し、そしてそれを先行的投企という仕方でも語り出す学であるという、解釈学自身の営みに、解釈学の創造性を求めることができるのである。

以上の(1)～(3)の成果のうち、(3)は従来の研究では触れられることのなかったため、本研究は(1)と(2)の成果を基礎にしてとりわけ(3)の成果を集中的に口頭発表および学術論文を通して公表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

山本幾生、ミッシュのハイデガー批判から見えてくるもの、『ディルタイ研究』第27号、日本ディルタイ協会、査読なし、2016年11月30日、4-33頁。

山本幾生、生の統一的全体性と分散的多様性(その3) - ディルタイとフッサールの対決への遡及、『文学論集』第66巻第2号、関西大学文学部紀要、査読なし、2016年9月、63-100頁。

山本幾生、生の統一的全体性と分散的多様性(その2) - ハイデガーのディルタイ批判に対するミッシュのディルタイ擁護、『文学論集』第66巻第1号、関西大学文学部紀要、査読なし、2016年7月、21-58頁。

山本幾生、生の統一的全体性と分散的多様性(その1) - ディルタイの方向づけからするミッシュの現象学(ハイデガー、フッサール)批判を介して、『文学論集』第65巻第3/4号合併号、関西大学文学部紀要、査読なし、2016年3月、25-55頁。

山本幾生、生からの二つの道程 - ディルタイとハイデガー、『ディルタイ研究』第26号、日本ディルタイ協会、査読なし、2015年11月30日、73-77頁。

山本幾生、ディルタイ研究 - 「解釈学の道筋」から「ディルタイ哲学の新たな切り口」へ、『ディルタイ研究』第25号、日

本ディルタイ協会、査読なし、2014年11月30日、58-66頁。

[学会発表](計5件)

山本幾生、ディルタイ、フッサール、ミッシュ、ハイデガー、その対決、「ディルタイ協会全国大会」2015年12月5日、慶應義塾大学三田キャンパス。(東京都)

山本幾生、ゲオルク・ミッシュのハイデガー批判から見えてくるもの、「ディルタイ協会全国大会」2015年12月5日、慶應義塾大学三田キャンパス。(東京都)

山本幾生、ミッシュを介したディルタイ研究、第46回ディルタイ・テキスト研究会、2015年10月24日、慶應義塾大学三田キャンパス。(東京都)

山本幾生、ハイデガーに対するミッシュの批判から見えてくるもの、第45回ディルタイ・テキスト研究会、2015年8月24日、関西大学セミナーハウス六甲山荘。(兵庫県)

山本幾生、『倫理学体系』(全集10巻)の成立事情と遺稿資料 - 編纂者序文に基づいて、第43回ディルタイ・テキスト研究会、2015年5月9日、慶應義塾大学三田キャンパス。(東京都)

[その他]

ディルタイ・テキスト研究会ホームページ
<http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~ikuoyama/lecture/DiltheyText.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

山本 幾生 (YAMAMOTO, Ikuo)
関西大学・文学部・教授
研究者番号: 00220450

(2)研究協力者

伊藤 直樹 (ITO, Naoki)
大石 学 (OISHI, Manabu)
瀬戸口 昌也 (SETOGUCHI, Masaya)
廳 茂 (CHO, Shigeru)
走井 洋一 (HASHIRII, Yoichi)
舟山 俊明 (FUNAYAMA, Toshiaki)